

武士道と現代

国際日本文化研究センター教授

笠谷 和比古

はじめに

- * 今、何故に武士道なのか 日本武士のあり方、生き方の中に見られる、
潔く強い個性を備えた自立した人格の像への憧憬
- * 自己に誇りをもって生き、志を高くかけて正々堂々と行動し、理非善悪をわきまえ、
恥を知ってけじめと責任に背を向けず、たとえ一人となっても困難な状況に敢然として
立ち向かっていくサムライの精神と行動
- * 現代日本社会が抱える諸問題
家庭・家族の病理 いじめと学校の病理 ニート、引き籠もり
後を断たない組織不正の問題 靖国・「A級戦犯」など外交問題
- * 筋のとあった人間、正常な家族関係、公正な社会、国際社会で尊敬される国
- * 武士道の今日的意義
武士道的個人モデル 武士道的組織モデル

一、「武士道」という言葉と内容

- * 武士道をめぐる誤解の言説
新渡戸・武士道論は近代明治における「伝統の発明」という誤解
- * 中世社会で「弓矢取る(身の)習い」「弓矢の道」と称せられていたものが、
戦国時代をへて近世・徳川時代に入るとともに「武士道」という新しい表現に。
- * 武田流軍学の経典『甲陽軍鑑』は徳川時代の初期、元和年間(1615~23年)に編纂。
同書において「武士道」という言葉が30数回出現。
- * 「武士道」は当初は戦場における勇武の振る舞いや精神を指していたが、徳川時代の200年以上に及ぶ持続的平和の下で、武士が領国の統治を司る役人、行政官として成長していくのにも
なって、「武士道」もまた武勇一辺倒では不十分とされ、治者としての心構え、倫理性を兼ね備えた
徳義論的武士道へと進化・発展を遂げる。

二、武士道における忠誠と自立の精神 「忠義」とは何か?!

- * 徳川時代の「大名家(藩)」における組織と個人
- * 「忠義」「忠誠心」とは何か 個人の自立の精神とどのように関係するか
- * 個人を埋没させるのではなく、個人を活かすシステム
個人の能動性、主体性を発揮させることで組織自体を活性化させ、その組織能力、
組織の目標達成能力を高めていくようなシステム。
- * 欧米型個人主義とは異なるタイプの「個人の自立」の可能性

[『葉 隠』の武士道]

- * 佐賀藩士の山本常朝が隠退後の一時に、同藩の若い武士の求めに応じて佐賀藩鍋島家の武士の心得の数々を口述して享保1（1736）年ころに成った書物。
- * 没我的献身と諫争の精神との二面性
 - 「忠義」とは没主体的な奴隷の服従を意味するものではない。
 - 「仰せ付けにさへあれば理非に構わず畏り」と主命の絶対的尊重を主張しながらも、
 - 「さて気になわざる事はいつ迄もいつ迄も訴訟すべし」
 - 「主君の御心入を直し」「御国家を固め申すが大忠節」
- * 主命への事なかれ主義的な恭順に対する嫌悪
- * 武士の主体性、能動性、自我意識
 - 「御家を一人して荷ひ申す志」
- * 扱いにくい存在。しかし主家が困難に直面し、存亡の危機に陥ったときでも、決してひるむことなく、また保身に走ってその場を逃げ出すということなく、己一人にても 御家の危難を救うべく、全身全霊を尽くして困難に立ち向かっていく者。

[室鳩巢 『明君家訓』の武士道]

- * 室鳩巢は近世中期を代表する朱子学者の一人。名は直清で、新助。
京都に遊学して木下順庵の門に入って朱子学を学んだ。同門に新井白石があり、
正徳1（1711）年に白石の推薦で幕府儒者に取り立てられる。
- * 正徳5年 刊行『明君家訓』 武士の自立性と節義の精神 - 理想の武士像
 - （主君の道）
「君たる道にたがひ、各々の心にそむかん事を朝夕おそれ候、某身の行、領国の政、諸事大小によらず少もよろしからぬ儀、又は各々の存じ寄りたる儀、遠慮なくそのまま申し聞けらるべく候」
 - （家臣の道）
「節義の嗜と申は口に偽りをいはず、身に私をかまへず、心すなをにして外にかざりなく、作法乱さず、礼義正しく、上に諂わず、下を慢らず、をのれが約諾をたがへず、人の患難を見捨てず（中略）さて恥を知て首を刎らるとも、おのれがすまじき事はせず、死すべき場をば一足も引かず、常に義理をおもんじて其心鉄石のごとく成ものから、又温和慈愛にして物のあはれをしり、人に情有るを節義の士とは申候」
 - （主命と信念との二律背反）
- * 主命と、家臣たる武士の自己の信念との二律背反問題
 - 「惣じて某ルガシが心底、各々のたてらるる義理（正義の道理、信念）をもまげ候ても某一人に忠節をいたされ候へとは努々以て存ぜず候、某に背かれ候ても、各々の義理さへたがへられず候へば某において珍重存じ候」

三、武士道的組織論

[「御家（組織）の強み」の思想]

- * 強固な御家、永続する御家とは何か

- * 主君・上位者の指導と命令のもの、苦情やわがままを口にせず、一糸乱れぬ団結力をもって目標達成にまい進していくような組織？！
- * トップの命ずるがままに行動するイエスマンの集りは組織の安定のごとくに見えて、組織の衰滅の原因
- * 忠義・忠節の核心は、主君・上位者の命令への随順ではなく、諫言の精神の堅持
悪しき主命、理不尽な上位者の命令に対する抵抗。その矯正。
疑問のある命令に対しては自己の意見を堂々と主張して屈せず、決して周囲の情勢に押し流されることのない自立性に満ち溢れた人物を、どれだけ多く抱えているか。
- * 組織が困難に陥ったときも任務を放棄したり、責任を転嫁することなく、独り最後まで踏みとどまって劣勢の挽回に奮闘努力するようなタイプの人間
日常的にも組織に腐敗をもたらす馴れ合いと、事なかれ主義の危険を不断にチェックしてくれる存在

[武士道的リーダー像]

- * 組織のリーダーとは、このような剛直の士を使いこなす器量を不可欠とする。
- * しかし自我意識の強い武士ばかりでは組織（御家）は纏まりが無いかに見える。
この矛盾はいかに解決されるのか？！
組織リーダー（主君）は、このような状況にどう対応すべきなのか
- * 一日に百里を駆けめぐる悍馬・駿馬をよく統御できる武将のイメージ

[結果責任の思想]

- * 主体性、自立性、そして諫言、異議申し立て、自主的判断と広範な裁量件
- * 結果責任 結果によって行動の正当性を立証
- * 不首尾に終わった結果に対する責任 “切腹”

[内部告発問題とコーポレート・ガバナンス]

- * 内部告発方式と諫言方式
 - * 組織内部の不正に対して立ち向かっていく姿勢は同じだが、その方法と思想が根本的に異なる。組織内の不正を社会に向けて暴き立てていく内部告発方式。
諫言方式は、組織内で不正・馴れ合いがなされようとしていることに対して、公然と異議申し立てを行って、これを未然に抑止していく方式。
- ex. 「官吏はその本属長官の命令に従うべし。ただし自己の意見を述ぶるを得」
(「官吏服務規律」第二条)

【主君「押込おみ」の慣行】

- * 悪主・暴君に対する家臣団の物理的抵抗 主君の監禁と廃立
 - * これまでの徳川時代の主従関係をめぐる研究のレベルでは、諫言は、主君の暴虐に対して家臣の側がとりうる抵抗の限界であると思われていた。
主君にすがる改心を求める哀願としての諫言(?!)
- a. 「押込」の合意形成。

b.「押込」の執行。

*藩主の面前へ家老・重臣の列座。「押込」の宣告。

藩主の身柄を拘束し、そのまま座敷牢ないしそれに準じた一室に監禁。

c.藩主としての「再出勤」。

*藩主は再び正常に藩主の地位に復帰できる可能性

行状の改善の可能性を観察。数カ月にわたる隠居猶予期間が設定。

*藩主より家臣団の側への「誓詞」の提出

d.強制隠居。

*上記の情状観察の期間内においても藩主に改心の情が見られないときには、「再出勤」の手続きをとることなく、そのまま強制的に隠居。押込隠居は「御家の強み」

正当行為としての主君「押込」。家老の職務権限上の正当行為。

「強制力をともなった諫言」 日常的な「諫言」の意義の再認識

「御家の強み」の思想を支える制度

[む す び に]

*武士道的個人 自立性 剛直の精神 節義の士 忠誠と自立の統合

*武士道的リーダー 悍馬・駿馬を乗りこなす力量と度量

*武士道的組織論

プロフィール

笠谷 和比古 Kazuhiko KASAYA

[現 職]

(国立大学共同利用機関) 国際日本文化研究センター研究部教授
伝統文化プロジェクト長

[専門、歴史学・武家社会論]

[略 歴]

1949年8月、神戸市出身(昭和24年8月15日生)。

73年3月、京都大学文学部史学科卒業

78年3月、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。

89年4月、国際日本文化研究センター助教授。

96年4月より現職。

この間、ドイツ・チュービンゲン大学、ベルリン大学、

中国・北京外国語学院、フランス・パリ大学の各客員教授

[著 書]

『新訂日暮砵』(岩波文庫 岩波書店、1988年)

『主君「押込」の構造』(平凡社選書 平凡社、1988年。88年度サントリー学芸賞
講談社学術文庫、2006年)

『近世武家社会の政治構造』(吉川弘文館、東京 1993年)

『関ヶ原合戦』(講談社選書 講談社、1994年)

『徳川吉宗』(ちくま新書 筑摩書房、1995年)

『江戸御留守居役』(吉川弘文館、2000年)

『関ヶ原合戦と近世の国制』(思文閣出版、2000年)

『武士道 その名誉の掟』(教育出版、2001年)

『武士道と現代』(扶桑社、2002年、文庫版 2004年)

『武士道と日本型能力主義』(新潮選書、2005年)その他